

論文

ジャーナリズム翻訳における「情報収集」の重要性について ——ハルバースタム『静かなる戦争』を中心に——

小倉 慶郎
(大阪府立大学)

1. はじめに

一口に「翻訳」といってもさまざまなジャンルがある。日本における最大の市場は産業翻訳と思われるが、それ以外にも特許翻訳、映像翻訳、法廷翻訳、医学翻訳、金融翻訳、文学翻訳、ジャーナリズム翻訳など、ジャンルを細分化すればいくらでも列挙できるほど多様である。しかしジャンルによって翻訳方法、翻訳姿勢が大きく異なることは、意外と知られていないようだ。翻訳者はそれぞれの分野に特化しているのが普通である。陸上競技で、短距離・中距離・長距離とすべての分野で世界記録を出せる万能選手がいないのと同じように、翻訳の分野でも万能な翻訳家は存在しない。産業分野の第一線で活躍する翻訳者は、すぐれた文学翻訳はできないし、また文学翻訳家が特許翻訳や法廷翻訳を上手にこなすことはできない。

ジャンルによる翻訳手法が異なるために、ある分野の翻訳者は、他の分野の翻訳にはあまり興味がないようだ。あるいは、奇異の目で他の分野の翻訳手法を見ることすらある。だが、ジャンルごとに大きく異なる翻訳手法が定着しているのには、その理由・必然性がある。少数の専門的な読者層を相手としている場合は、読者に専門的な知識があるため、「直訳」が好まれる。一方、多数の一般大衆を対象にしている場合は、読者に専門知識がないから、わかりやすい翻訳、すなわち「意訳」が好まれるという傾向がある（ジャンルごとの翻訳傾向の詳細については、いずれ別論文にまとめる予定なので、ここでは大雑把な方向性を述べるだけにとどめたい）。

本稿では、数ある翻訳ジャンルの中でも「ジャーナリズム翻訳」を取り上げることにする。「ジャーナリズム翻訳」とは事実を翻訳する作業といつていいだろう。「ジャーナリズム翻訳」は多数の一般読者を対象とするために、大幅な「意訳」を伴うことが多い。翻訳者はコンテクスト (context) と状況の細部を理解し、専門知識の無い一般読者にわかりやすい訳出をしなければならない。一般の人々が「翻訳」という言葉を聞いて想像するような「縦のものを横に直す単純作業」はほとんど無いといってよい。しかし、「意訳」には「誤訳」がつきまとうものだ。大幅な「意訳」をして、なおかつ正しい情報を伝える。そのためには、水面下での、膨大な情報収集作業が必要となるのである。

原文には多義性がつきものである。ひとつの文はいくつもの解釈ができる、ということだ。ジャーナリズムの文章は、多義性を抑えたドライな文章が多い。⁽¹⁾ それでもところで原文はさまざまな光を放つ。それに対して翻訳者は、多様な解釈の中から、ひとつの事実を探り当てなければならない。もしも事実と違うことを訳そうものなら、原稿段階であれば出版社の校正担当者から、出版後であれば賢明な読者からたちまちクレームがつくだろう。「原文にはそう書いてあった」あるいは「原文からはそうとしか読めなかつた」

という言い訳は通用しないのである。たったひとつの真実を探り当てるために、多様な情報が検索される。そしてその結果が最終訳文に反映されることになるのだ。しかしこの情報収集作業は、陽の目を見ない「陰の作業」「水面下の作業」といってもいいだろう。

本論に入る前にひとつだけ具体例を挙げておこう。

At about that time, a psychopath crashed his plane into the White House.

これは、「精神異常者が、飛行機をホワイトハウスに激突させた」と読める。もしもそんなことが起きていれば大事件である。実はそのように訳せば大誤訳だった。最終訳はどうになったのか想像していただきたい。最終訳に至るまでの詳細な検討は本論に譲るが、この一文から、最終訳へ行き着くためには、事実関係をたどる丹念な裏取り作業が必要であった。

白鳥は、一見優雅に泳いでいるように見えても、水面下では必死に足を動かしているという。海面に浮かぶ氷山は、小さいように見えても、水面下にその数十倍に及ぶ氷が隠されているという。この分野の翻訳作業に、このような比喩を使っても決して誇張とはいえないだろう。

本稿は、今まで陽の目を見なかつた「ジャーナリズム翻訳」における一連の作業——具体的にどのような情報収集作業を経て、最終訳文に至つたか——を実証的に検討することが目的である。それは、水面下で必死にもがく、白鳥の足の動きを白日の下にさらし出すことにも似ている。

2. 文学翻訳との比較

本論に入る前に、文学の翻訳について概観したい。一般に広く知られている「文学翻訳」と比較することによって、「ジャーナリズム翻訳」の特質が浮き彫りになると見えるからである。

筆者は、大学・大学院生時代には文学研究を専攻した。指導教授は、スタインベック(John Steinbeck)を専門とする稻沢秀夫先生であった。先生が、ゼミの授業の最中にこう漏らしたことがある。「卒業論文を読めば、その人がきちんと英語の原書を読んだのか、それとも翻訳を読んだだけなのかわかるよ」。果たして、論文を読んだだけで、そんなことがわかるのだろうか? 原書も翻訳も、作者の意図を理解するということでは変わらないのではないだろうか……。当時の私には、理解できなかつたが、長い間心に引っかかる言葉であった。しかし現在、プロとして翻訳をするようになった私には、恩師の真意がよく理解できる——原文には多義性があり、その中からひとつの意味を選び取つて訳すのが「翻訳」なのだ。だから、翻訳だけを読んだ学生は、翻訳家の視点からしか作品を見ることができない。そのため読みが平板になる。一方、自分で原文を読めばさまざまな解釈が可能になる。「翻訳」というメガネをかけた卒業論文は、読んだだけで、そのことがすぐにわかるよ。そう恩師は言つていたのだ。

このエピソードは、「文学作品はほとんど常にさまざまな解釈を許す」ということを如実に物語ついている。いや、豊かな多義性があるからこそ一流の文学作品と呼ばれる、といつても過言ではないだろう。誤解を恐れずにいえば、文学作品の価値は、読者が行間にどれだけ多くのものを読み取れるかにかかっているといつてもいい(さらに、文学研究の分野では、作品は著者の意図を超えた「テクスト」として解釈されることが多い)。その場合、作

品の解釈はほぼ無限に広がっていくことになる)。

したがって文学翻訳では、翻訳家はさまざまな解釈の中からひとつの「読み」を選択することになる。それが文学翻訳の面白さであろう。原文の読み違え(誤訳)を別にすれば、どの解釈をよしとするかは、個人の嗜好に任されるといつていい。⁽²⁾

ここで文学翻訳の典型例を見てみたい。以下はシェイクスピア(William Shakespeare)の*Hamlet*に出てくる有名な一節である。

Ham. To be or not to be, that is the question,
Whether 'tis nobler in the mind to suffer
The slings and arrows of outrageous fortune,
Or to take arms against a sea of troubles,
And by opposing end them.

‘To be or not to be, that is the question’ の部分だけを取り上げて、今まで日本でどのような訳が行われたのかを概観してみよう。(以下翻訳出版の年代順に挙げる)

- ①世に在る、世に在らぬ、それが疑問じや。(坪内逍遙訳)
 - ②生か死か…… それが問題だ。(久米正雄訳)
 - ③存らふべきか、それとも存らふべきでないか、問題はそれだ。(横山有策訳)
 - ④長らふべきか、死すべきか、それは疑問だ。(本多顕彰訳)
 - ⑤生か、死か、それが疑問だ。(福田恆存訳)
 - ⑥在るか、それとも在らぬか、それが問題だ。(大山俊一)
 - ⑦このままにあっていいのか、あってはいけないのか、それが知りたいことなのだ。(木下順二訳)
 - ⑧生きるのか、生きないのか、問題はそこだ。(永川怜二訳)
 - ⑨このままでいいのか、いけないのか、それが問題だ。(小田島雄志訳)
 - ⑩生きてとどまるか、消えてなくなるのか、それが問題だ。(松岡和子訳)
- (訳文は『シェイクスピア大全』CD-ROM版、新潮社による)

最も古い坪内逍遙訳から最新の松岡訳まで、それぞれの訳文を見て気がつくのは、「To be or not to be」を、その直後にある whether A or B を指す、形式的な役割をする語句と捉える訳者(木下順二、小田島雄志)、「be」を‘exist’と同義と考えて「生きる、死ぬ」と考える訳者(坪内逍遙、久米正雄、横山有策、本多顕彰、福田恆存、大山俊一、永川怜二、松岡和子)に大きく二分されることだ。しかし、ご覧の通りそれぞれの訳に味があり、どの訳も間違っていない、といつていいだろう。これが文学の翻訳である。

3. ジャーナリズム翻訳と実例の検討

一方、訳者の解釈よりも「事実」が優先されるのが「ジャーナリズム翻訳」である。このジャンルでは、翻訳者は、多義性を含む原文の中からひとつの「事実」を探り当てなければならぬ。そのためには「情報収集」が極めて重要な作業となるのである。

本稿では、この「裏取り」作業を明らかにするために、筆者の拙訳を取り上げることにする。訳者自身にしか、水面下の作業はわからないからだ。題材とするのは、アメリカ

のジャーナリスト、デービッド・ハルバースタム (David Halberstam) が著した *War in a Time of Peace* とその邦訳『静かなる戦争——アメリカの栄光と挫折』である。この翻訳は、NHK の放送通訳・翻訳で活躍する畏友たちの協力を得た共訳であるが、筆者が senior translator として全体をまとめたものであり、情報収集作業を明らかにするのに最適であると考えた。⁽³⁾⁽⁴⁾

『静かなる戦争』は、冷戦の終結、すなわち父ブッシュ政権 (George Herbert Walker Bush, 1989 – 1993) の終末から、第1・2次クリントン政権 (William Jefferson Clinton, 1993 – 2001)、および息子ブッシュ政権 (George Walker Bush, 2001 –) の誕生までの、10年余りに及ぶアメリカの軍事・外交史を綴ったものである。ジャーナリズムではあるが、現代史の叙述に近いものといえる。現代では、リアルタイムの出来事ならインターネットを使って容易に情報検索が可能である。ところが、本書は、10数年前、あるいはベトナム戦争時までに遡って、詳細な事実が描かれているため、事実を確定するための情報収集作業は困難を極めた。歴史書ともいえる本書の翻訳の難しさは、インターネット出現以前の詳細な出来事が書かれていることにある。それでもウェップ・サイトによって事実を確定できた例が少なくないから、主にインターネットを利用した改変例を挙げることにする。最初に「初訳」を取り上げ、それがウェップ・サイト（または文献）の検索でどのように修正されたのかを見て行きたい。⁽⁵⁾⁽⁶⁾

改変例は、便宜上、7つのカテゴリーに分類し、それぞれのカテゴリーにおいて、代表的なものを1・2例挙げることにする。

①時（時系列）に関するもの

時に關して、訳者が特に注意したのは、by + year (～年までに) の訳出である。日本語では、「～年までに… していた」と言う表現はあまり使わない。英語では好まれる表現でも、日本語では「～年に… した」というのが普通である。したがって、不要なノイズを取り除くためにも、by+year が出るたびにいちいち年表で正確な年を調べ、可能ならば「～年に… した」という表現に改めた。ここでは、by+year 以外で、情報検索の結果、訳文を改めた例を取り上げたい。

1991年、当時のアメリカ大統領、父ブッシュは「湾岸戦争」に勝利した。支持率は90%を超えた、「飛ぶ鳥を落とす勢い」だった。

He (=George W. Bush) was just coming of age as a political operative in his own right, and he was euphoric about the meaning of these latest events. “Do you think the American people are going to turn to a Democrat now?” he asked. (p.9)

初 訳 息子のブッシュは、ちょうど政治家として一人前になろうとしていた時期⁽⁷⁾で、最近の情勢に有頂天になっていた。「今、この時期に、国民が民主党を頼ると思うか？」と言ったという。(上巻、p.9)

問題点 ジョージ・W・ブッシュのこの発言の時期は1991年の夏から秋にかけてである。果たしてこの時期に息子ブッシュは、政治家として一人前になろうとしていたのだろうか？

事 実 息子ブッシュが、政治家としてスタートしたのは1994年。この年に、テキサス州知事に選出された。

参考サイト：

In 1994, Bush took a leave of absence from the Rangers to run for Governor of Texas against the popular incumbent, Democrat Ann Richards. On November 8, 1994, he defeated Richards, 53% to 46%.

http://en.wikipedia.org/wiki/President_George_W._Bush#Business_and_early_political_career

最終訳 これから政界に足を踏み入れようとしていた息子のブッシュは、最近の情勢に有頂天になっていた。「今、この時期に、国民が民主党を頼ると思うか?」と言ったという。(上巻、p.9)

②場所に関するもの

場所の翻訳は、そのまま書いてある通りに訳せばいいと思う人も多いかもしれない。しかし訳語の微調整が必要な場合もある。以下は、「湾岸戦争」で、アメリカ軍の勝利に重大な貢献をした二人の将軍、シュワルツコフ (Norman Schwarzkopf) とパウエル (Colin Powell) の記述である。

Both Schwarzkopf and Powell were from the New York area.(p.13)

直訳 シュワルツコフもパウエルもニューヨークの出身である。(上巻、p.15)

問題点 このままだと、シュワルツコフもパウエルもニューヨーク市(あるいは州)の出身であると読める。

事実 パウエルはニューヨーク市生まれ。シュワルツコフはニュージャージー州トレントン生まれ。

参考サイト：

Colin Powell was born in New York City on April 5, 1937. The son of Jamaican immigrants, Luther and Maud Powell, he was raised in the South Bronx.

<http://www.lucidcafe.com/library/96apr/powell.html>

Norman Schwarzkopf was born in Trenton, N.J., on Aug. 22, 1934. His father was one of the best U.S. Army generals for his time, with the rank of a major general, the third highest rank possible. His father, being heavily involved in the military, inspired Norman to try to become a general.

http://myhero.com/myhero/hero.asp?hero=n_schwarzkopf_montvale

最終訳 シュワルツコフもパウエルも、ニューヨーク近郊の出身である。

③大幅な補足が必要なもの

外国の事情、人物を知らない日本人読者のために、英→日翻訳では、簡単な解説を名詞の直前につけることがある。ジャーナリズム翻訳に限らず、翻訳全般で広く使われている常套手段である。例えば、ハリー・ベラフォンテという人名は、特定の年代層を除いて、

日本の一般読者にはなじみが薄いかもしれない。その場合、「歌手の」と説明をつけたりする。筆者は、翻訳におけるこの手法を「枕詞法」と呼んでいる。

The geopolitical consequences of what had happened in Somalia were demonstrated almost immediately in Haiti. (p.267)

ソマリアでの失敗の影響は、すぐさまカリブ海の島国ハイチに現れた。(下巻、p.8)

ハイチという国を、アメリカ人が地理的に熟知しているのは当然であるが、日本人の一般読者にとっては耳慣れない国だろう。そこで「カリブ海の島国」という「枕詞」をつけたのが上の例である。

ところが、日本人読者の背景知識が無いために、「枕詞」をつけるだけでは済まない場合がある。ここでは、日本人読者のために訳文の大幅な補足を必要としたものを2例挙げたい。

まず、父ブッシュ政権から、クリントン政権に移った頃の実例から。クリントン政権は、共和党政権から引き継いだ巨額の財政赤字解消を目指し、やむを得ず財政均衡路線を取ることになった。

“Goddamnit, I’ve become Eisenhower,” he(=Clinton)said.(p.223)

直訳 クリントンはつぶやいた。「ちくしょう、俺は、アイゼンハワーになっちまった」。

問題点 アメリカ人の政治通、知識人クラスなら即座にわかるこの一節も、ほとんどの日本人読者には理解不能。なぜクリントンがアイゼンハワーになったのだろうか？

事実 アイゼンハワー (Dwight David Eisenhower) は財政均衡路線を取った、第34代アメリカ大統領（共和党、1953 – 1961）である。クリントンは、第1期政権では、財政赤字のため、自分が望む財政政策を取れなかった。民主党の大統領なのに、赤字解消のため共和党大統領の真似 (=財政均衡路線) をせざるえない自分に腹が立って、この発言へとつながったのである。

参考サイト：

He(=Eisenhower) added a tenth cabinet position, creating the Department of Health, Education, and Welfare, and achieved a balanced budget in three of the years that he was President.

<http://en.wikipedia.org/wiki/Eisenhower>

最終訳 クリントンはつぶやいた。「ちくしょう、俺は、(財政均衡路線をとった共和党の大統領) アイゼンハワーになっちまった」。(上巻 p.401)

次例は、1994年の話。アメリカはハイチへ軍事侵攻しようとするが、カーター元大統領 (Jimmy Carter) を含む米特使の活躍により、ぎりぎりのところで侵攻は回避される。しかしタカ派であるゴア副大統領 (Al Gore) は、この決定に不満をもつ。

“What would *you* rather do?” Clinton asked Gore. “Go back to Haiti or sip champagne

in Harry Belafonte's apartment?"(p.272)

初訳 クリントンはゴアに訊いた。「君だったらどうする？今ハイチに戻ると、歌手のハリー・ベラフォンテのアパートでシャンパンを飲むのと、どちらがいいかな？」

問題点 アメリカが、ハイチへの軍事侵攻をあきらめたことに対してゴア副大統領が憤る。クリントンは、怒り心頭のゴアをなだめるため、当意即妙の質問を投げかける、という場面。問題は、なぜハリー・ベラフォンテ (Harry Belafonte) がここで出てくるのか、ということである。この訳文を読んだだけでは、日本人読者は混乱してしまう。文章の前後にはヒントとなる文すらも書かれていません。ひょっとしてベラフォンテは、ハイチ出身なのだろうか？

事実 ベラフォンテは、ニューヨーク生まれ。ジャマイカ系アメリカ人である。ジャマイカは、同じカリブ海で、ハイチの西隣にある島。人権運動家でもあるベラフォンテは「ハイチの民主化」を支援しているようだ。

参考サイト：

Harry Belafonte (born Harold George Belafonte on March 1, 1927 in Harlem, New York, United States) is a Jamaican-American calypso musician, actor and outspoken liberal who used his fame as an entertainer in the cause of human rights.

http://en.wikipedia.org/wiki/Harry_Belafonte

Harry Belafonte once brought tears to my eyes of laughter at one of his concerts, and later brought tears to my eyes with his passion for an event which is unfolding today, the return of President Aristide to Haiti. (クリントン大統領のスピーチより)

<http://www.ibiblio.org/pub/archives/whitehouse-papers/1994/Oct/1994-10-14-President-at-Arts-and-Humanities-Awards-Ceremony>

最終訳 クリントンはゴアに訊いた。「君だったらどうする？今ハイチに戻ると、(アメリカでハイチの民主化を支援している) ハリー・ベラフォンテのアパートでシャンパンを飲むのと、どちらがいいかな？」(下巻、p.18)

④事件の詳細に関するもの

事件の細部には常に注意を払わなければならない。原文では、事件のほんの一部しか扱っていないなくても、訳者は事件全体に関する詳細な記事を読み、細心の注意を払う必要がある。直訳すると、とんでもない誤訳が生じる場合があるからだ。

次は本稿の冒頭でも挙げた例である。1994年に起きた事件であるから、2001年9月11日の同時多発テロよりも7年前の出来事である。

At about that time, a psychopath crashed his plane into the White House.(p.244)

初訳 「ちょうどその頃、精神障害者が飛行機をホワイトハウスに激突させた」

問題点 このままの訳文だと、現在の読者は「テロ発生でホワイトハウス壊滅か」と考えるかもしれない。「飛行機」という訳語は、「旅客機」ととられる可能性も高い。この訳文

を読んだ読者の多くは、「ハイジャックされた旅客機がホワイトハウスに激突、建物が大損害を受けた」と考えるだろう。⁽⁸⁾

事 実 実際は、盗んだセスナ機に乗った男が、ホワイトハウスの South Lawn に墜落した事件だった。

参考サイト：

September 12, 1994: A man, flying a stolen Cessna airplane, entered the prohibited airspace around the White House just before 2 a.m. After passing over the Ellipse, the man, identified as Frank Eugene Corder, crashed on the lawn just south of the Executive Mansion. The plane struck a tree near the South Portico steps and hit a corner on the first floor of the White House. President Clinton and his family were not in the residence at the time. Corder was killed in the crash.

<http://archives.cnn.com/2001/ALLPOLITICS/stories/02/07/whitehouse.inciden>

最終訳 ちょうどその頃、精神障害者がセスナ機に乗り、ホワイトハウス敷地内に墜落する事件が起きた。(上巻、p.437)

⑤知名度が低い固有名詞の処理

知名度が低く紛らわしい固有名詞の場合、訳者も勘違いしまうことがある。また、そのような固有名詞の訳出は、知名度の高い固有名詞と関連付けて訳出したほうが一般読者に親切のように思われる。

具体例を挙げよう。以下は、ジョン・ケリー (John Forbes Kerry) の経験に関する件りである。ケリーといえば、2004 年のアメリカ大統領選挙では民主党候補にもなった著名な上院議員。ベトナム戦争への従軍で勲章を受けたが、のちに反戦運動に転じたことでも有名である。

There were the rare times when he was with his old buddies from the SEALs and they would sing the bitter antiwar Australian song “And the Band Played Waltzing Matilda.” (p.113)

初 訳 ケリーは、たまに「シールズ」時代の友と旧交を温める時は、決まって、オーストラリアの反戦歌「ウォルツィング・マチルダ」を歌った。

問題点 「ウォルツィング・マチルダ」は、オーストラリアの第 2 の国歌ともいわれる国民歌であり、世界的にも有名である。しかし歌詞を読むと反戦歌とは読めない。

参考サイト：

‘Waltzing Matilda’ is Australia’s best known and much loved national song. It is recognised by every Australian, and has attained international status as the nation’s unofficial national anthem.

<http://www.nla.gov.au/epubs/waltzingmatilda/>

Waltzing Matilda

Once a jolly swagman camped by a billabong
 Under the shade of a coolibah tree
 And he sang as he watched and waited 'til his billy boiled
 You'll come a-waltzing matilda with me
 (以下省略)

<http://www.anu.edu.au/people/Roger.Clarke/WM/WMText.html>

事実 “And the Band Played Waltzing Matilda.” は、「ウォルツィング・マチルダ」そのものではなく「ウォルツィング・マチルダ」を下敷きにしたベトナム反戦歌だった。第一次世界大戦中、トルコのガリポリ上陸作戦に従軍した主人公が、両足を吹き飛ばされ、もう踊ることができなくなった、という悲惨な歌詞である。

A popular 'folk' song called 'And The Band Played 'Waltzing Matilda" was written by Scottish-Australian balladist Eric Bogle. Interpretations vary, but some end with a haunting rendition of 'Waltzing Matilda'. It's an anti-war song, nominally about Gallipoli, but really about Vietnam.

<http://www.anu.edu.au/people/Roger.Clarke/WM/Bogle.html>

And the Band Played Waltzing Matilda

When I was a young man I carried my pack
 And lived the free life of the rover
 From the Murray's Green Basin to the dusty outback
 I waltzed my Matilda all over
 Then in 1915 my country said "Son,
 It's time to stop rambling, there's work to be done."
 So they gave me a tin hat and they gave me a gun
 And they sent me away to the war
 And the band played Waltzing Matilda
 As the ship pulled away from the quay
 Amidst all the cheers, flag waving and tears
 We sailed off for Gallipoli
 (中略)
 Now those that were left, well we tried to survive
 In a mad world of blood, death and fire
 And for ten weary weeks I kept myself alive
 But around me the corpses piled higher
 Then a big Turkish shell knocked me arse over tit
 And when I woke up in my hospital bed
 And saw what it had done, I wished I was dead
 Never knew there were worse things than dying
 For no more I'll go waltzing Matilda

All around the green bush far and near
For to hump tent and pegs, a man needs two legs
No more waltzing Matilda for me

(以下省略)

<http://www.hotkey.net.au/~marshalle/memories/waltz.htm>

最終訳 ケリーは、たまに「シールズ」時代の友と旧交を温める時は、決まってオーストラリアの国民歌「ウォルツィング・マチルダ」をもじった反戦歌を歌った。(上巻、p.194)

⑥原文が事実と違っている場合の処理

原文が事実と違っていたらどうするのか?通訳者であれば、スピーカーが明らかに間違っている場合でも、「スピーカーがそう発言したのだから、そのまま訳すべき」「いや、事実に合わせて修正すべき」という二派に分かれるだろう。私の経験からは、「そのまま訳すべき」という通訳者が大半であろう。しかし翻訳の場合、特にジャーナリズム翻訳に限っていえば、事実に合わせて修正する訳者が大勢を占めるのではないだろうか。あとで読者から「翻訳が間違っている」という見当違いのクレームがつく恐れがあるからだ。クレームに備えて、訳者が微調整を行うのはよくあることだ。また、真偽のわからない箇所の訳文は編集判断でカットしてしまうことすらある。

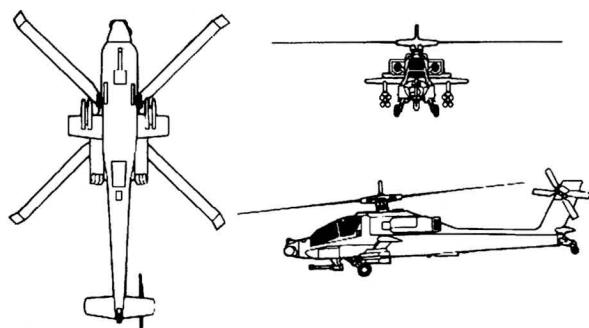
これから挙げる2つの例は、戦争の場面から採ったものである。1999年のユーゴ空爆の件りである。ここでは軍事用語が頻出し、翻訳者泣かせであった。翻訳者は、手に入る限りの軍事用語集、参考文献、ウェブ・サイトを参照し対処しなければならなかつた。以下は、アメリカ軍の最新鋭 AH64 アパッチ攻撃ヘリの説明。

It was fast, could fly just above tree level at high speeds, and even had curved rotor blades to muffle noise. (p.464)

初 訳 小回りがきき、樹木ほどの高さの低空を高速飛行できる。騒音を抑えるため、回転翼は**湾曲**している。

問題点 翻訳は、原著の記述に従うのが原則ではある。しかし軍事関連の翻訳は、専門家からもクレームが出ないよう、細心の注意を払う必要がある。果たして、アパッチの回転翼は「湾曲」しているのだろうか?

事 実 「週刊 WORLD WEAPON」
(<http://www.de-club.net/wwp/index.php>) の写真および、数多くのアパッチの映像を調査した結果、アパッチの主翼は湾曲していないことが判明した。代わりに、先端に「後退角」がついており、騒音を低減してステルス性を高めている。



参考サイト:

<http://tomcat85.free.fr/AH->

64_Apache.php

ヘリコプター・ステルス性の弱点とも言うべきメインロータープレードの騒音の問題は、特に注意を払って制作され、5枚のプレードの先端に後退角を付けた形とし騒音を極力小さくする事に成功した。

<http://www.f5.dion.ne.jp/~mirage/hypams01/rah66.html>

最終訳 小回りがきき、樹木ほどの高さの低空を高速飛行できる。騒音を抑えるため、回転翼には角度がついている。(下巻、p.379)

もう一例ユーゴ空爆の記述から。戦争の記述が延々と続くこの章では、翻訳者は、石橋を叩いて渡るように、一步一步事実関係を確かめながら、先へ進んでいかなければならぬ。以下は、レーダーにほとんど映らない、ステルス機B-2(爆撃機)とF-117(戦闘機)の記述である。

Both planes (=B-2,F-117) required a special kind of surface that was radar-resistant, and they were designed so that there would be no flat surfaces that might bounce radar beams back to the sender. (p.459)

初訳 どちらも機体表面には、レーダー波を吸収する特殊な材質が使用されている。また機体の形状も、レーダー波を送信元にそのまま跳ね返さないよう、垂直面がないように作られている。

問題点 B-2,F-117の両機とも、本当に機体に垂直面が無いのだろうか？

事実 B2にはこの記述はあてはまるが、F-117にはあてはまらないようだ。

参考図書：

同じステルス技術でも、F-117は「機体全体を斜めの平面形で囲んでやって、ある方向から来た電波が機体に当たってそのまま戻らないようにする」方法を、B-2は「機体全体を滑らかに丸くしてやり、どの方向から電波が来ても別の方向に反射波を送り出すようにする」方法を採用している。

江畑謙介(1998)『兵器の常識・非常識(下)空軍・ミサイル兵器篇』並木書房、pp.318-319

最終訳 どちらも機体表面には、レーダー波を吸収する特殊な材質が使用されている。また機体の形状も、レーダー波を送信元にそのまま跳ね返さないよう、垂直面を減らし、表面をなめらかにするなどの工夫がされている。(下巻、p.369)

⑦事実を確認できず、見切り発車したもの

いくら調べても、結局事実を確認できないということは多々ある。例えば双子の場合、日本では「姉」「妹」あるいは「兄」「弟」と長幼の順序をきちんと表記するのが普通であるが、英語ではその習慣は無い。病院でどちらが先に生まれたかなど、いくら調べてもわからぬことが多い。その場合は、「見切り発車」して誤語をつってしまうこともある。

『静かなる戦争』では、事実である可能性が100%に近いと判断した場合のみ、「見切り発車」をした。筆者の記憶している限りでは、「見切り発車」は以下の1例だけである。やはりユーゴ空爆の場面からだ。

…but while no part of the church's main structure was apt to be damaged, its beautiful, historic windows might be destroyed.(p.471)

初 訳 しかし、近くにある教会の建物自体が破壊されることはなさそうだったが、歴史的に重要な窓ガラスが割れてしまう恐れがあった。

問題点 キリスト教の教会であれば、恐らく「ステンドグラス」であろう。情報収集により裏を取りれば、「ステンドグラス」と訳した方が読者に対して親切である。イメージも明確となる。

事 実 結局、書籍やインターネットでどんなに調べてもこの教会を確認できなかった。そこで‘educated guess’により、わかりやすい訳語を採用することにした。

最終訳 しかし、近くにある教会の建物自体が破壊されることはなさそうだったが、歴史的に重要なステンドグラスが割れてしまう恐れがあった。(下巻、p.393)

4. 終わりに

日本の学問の世界には、海外の「理論」が侵入しやすいようだ。しかし「理論」には流行りすたりがある。一時は人気があっても、数十年のスパンで見ると、ひとつの理論は衰退をたどり、顧みられなくなることがある。そしてまた別の理論が力をもち、もてはやされるようになる。たとえば、英語学の分野では「生成文法」が一時期大流行したが、いまは「認知言語学」に主流が移りつつあるようだ。あるいは両派の対立関係の中で、後者の方へ勝勢が移りつつあるといつてもいいだろう。精緻な理論は一見ありがたいように思えるが、理論操作が行き過ぎて、時として現象面の観察がおざなりになる傾向があることも否めない事実である。

言語やコミュニケーションの研究で、海外の理論から学ぶことも重要であろう。だが、言語研究は、何よりも現象面の観察を重視すべきである、というのが筆者の立場である。本論も、「現象観察を第一とする」という筆者の研究姿勢に沿って書かれたものである。

筆者がたびたび主張しているように、日本の翻訳は、欧米と比べて特殊な発達を遂げてきた。⁽⁹⁾ そのために、日本の翻訳の現場には、欧米には見当たらぬ「宝の山」が埋もれているのである。日本の翻訳の実態を知るためにには、何よりも日本における実務翻訳の作業面を明らかにすることが不可欠である。実務の現場にこそ、膨大な宝が埋まっているのだ。

本論は、「ジャーナリズム翻訳」の中で、「情報収集」という目に見えない作業面に焦点をあてたパイオニア的研究である。⁽¹⁰⁾ 研究としては端緒についたばかりであり、困難な課題も多い。今後さらに包括的、網羅的な研究が必要であるが、情報収集を訳文に反映するまでの過程は訳者自身にしかわからないことが多く、他訳者の翻訳を調査しても表面的な分析・分類作業に陥りやすい可能性がある。それが大きな壁である。それでも、本稿により、今まで明らかにされなかつた重要な鉱脈のひとつに光を当てることができたとすれば、幸いである。

今後も、日本のさまざまな分野の翻訳実務を精密に調査し、分野間の翻訳手法をパースペクティブに見つめていきたい。最終的には、日本における翻訳の全体像を明らかにでき

れば、と考えている。

注

本稿は、筆者が2005年10月8日、日本英語コミュニケーション学会第14回年次大会（於・関西学院大学）で発表した内容をもとにしている。テキストとしては以下のものを用いた。

Halberstam, David (2001). *War in a Time of Peace*. Scribner

デービッド・ハルバースタム著、小倉慶郎・三島篤志・田中均・佳元一洋・柴武行訳(2003)『静かなる戦争—アメリカの栄光と挫折』PHP研究所

- (1) 文学作品と比較すると、ジャーナリズムの文章は、できるだけ「多義性」を少なくし、読者による解釈の余地を少なくした、誤解の少ない文章である。それでも、原文の「多義性」は完全には無くならず、真実確定のために、翻訳者はしばしば情報検索をしなければならない。
- (2) 筆者が、日本英語コミュニケーション学会の年次大会で発表した直後の10月20日に、長島要一(2005)『森鷗外—文化の翻訳者』(岩波新書)が出版された。長島氏は、デンマークのコペンハーゲン大学で異文化研究・地域研究所副所長を務める気鋭の研究者であるが、その中で以下のように文学作品の翻訳について述べている。

文学作品の場合、その過程があらかじめ処理され操作されているために、表現の輪郭だけは明瞭ですが、内容はというと、いくつかの解釈が常に可能です。端的に言ってしまえば、作品を読む読者も、「翻訳」をしながら作品を自分なりに解釈しているのです。さらに言えば、ひとつの作品の唯一正しい読み方など存在しません。だからこそ、読者のあなたの読みは常に正しいということになります。(p.20)

ちなみに、この考え方は、スタンリー・フィッシュ(Stanley Fish)などが唱える、reader-response theoryに近いものである。彼らによれば、作品の意味は読み手が「創造」するのだという。たとえば *Is There a Text in this Class?: The Authority of Interpretive Communities* (Cambridge: Harvard University Press, 1980) 等に、フィッシュの主張が書かれている。この理論も、筆者の観点からすれば、「原文の多義性」をバックグラウンドに展開したものといえる。

- (3) この翻訳は、軍事・政治・国際関係の専門家からは高い評価を頂いている。東京大学公共政策大学院、名古屋市立大学人文社会学部国際文化学科、慶應義塾大学などでテキスト・参考図書として使用された。これは、専門家が、「事実関係は（ほぼ）正確に訳されている」と評価した証であろう。
- (4) 仮に筆者は‘senior translator’の役割をした、と書いたが、放送業界用語では‘デスク’の役割を果たしたといえるだろう。ジャーナリズム研究の用語で言えば、筆者が‘gate keeper’機能を果たした、ともいえるだろう。
- (5) 本論に掲載したウェップ・サイトや参考図書は、翻訳者が活用した資料のほんの一部にすぎない。あくまで代表的なものを掲載するに留めた。実際は、はるかに多数のサイトや専門書を検索した結果、「最終訳」にたどり着いていることを強調しておきたい。論文の性質上、検索サイト等すべてを載せることはできないし、またそうすると、かえって陰で行われている作業がわかりにくくなる恐れがある。本論では、代表的な参考資料のみを掲載していることをご理解いただきたい。

なお、「インターネットのサイトは信用性が無く、書籍は信頼できる」と主張する人が多いが、筆者の経験からいえば、どちらも事実の間違いが存在する。多くのウェップ・サイト、資料を参照しているうちに、自ずと真実が明らかになる、というのが筆者の考えである。ひとつのソースに頼ることは、事実をたどる上で非常に危険なのである。ただ、事実関係については共同通信社の『世界年鑑』の恩恵を大いに受けた。『世界年鑑』は、ジャーナリズム分野では最も信頼のおける必携書である。1989年から2001年までの『世界年鑑』を参照したために、なんとか訳了までこぎつけたといえるほどである。

- (6) 以下は、当時、筆者が共訳者たちへ送ったEメール（私信）の一部である。翻訳のどのような側面に訳者が気を遣っているのかがお分かりいただけると思う。

現在、ぼつぼつ原稿が送られてきてますが、日本語よりも「事実関係」のチェックが気にかかります。「原文ではそう読める」ものであっても、事実と違うとコッパミジンです（笑）。事実が正しければ、踏み込んだ訳もできます。「歴史の教科書」としても残るもの（？）なので、まず第一に事実関係のチェックを丹念にしてくださるようよろしくお願いします。

- (7) この部分はいま読み返してみると誤訳のようだ。‘operative’は米語では、‘intelligence agent’の意味で使われることが多いから、‘political operative’は、‘political pundit’（政治通）、‘political

critic' (政治評論家) 程度に解釈すべきであった。しかし、締め切りがあり限られた時間内に仕上げなければならない出版翻訳の場合、ある程度の誤訳はやむをえない。本論は、翻訳者の作業を明らかにすることが目的であるから、語学的な解釈の当否は取り上げないことにする。

- (8) 筆者は、大阪外国大学で外国人留学生を対象とした日→英翻訳の授業を担当している。その中で、この例文を受講生に示したところ、ニュージーランド人の男性が思わず「ホワイトハウスに飛行機が激突？ いつこんなことがあったんですか？ またテロが発生したんですか？」と発言した。この一文を読んだだけでは、英語母語話者でも、「大事件発生」と考えるのが普通のようだ。
- (9) たとえば小倉（1999）「放送通訳をめぐる諸問題」（*JASEC BULLETIN* 第8巻）では、「日本は世界一の翻訳大国であるのと同様、日本は世界一の放送通訳大国」であることを指摘し、小倉（2003）「英日翻訳試論——なぜ英日翻訳には、二つの相反する流れがあるのか」（*JASEC BULLETIN* 第12巻）では、日本では英→日翻訳と日→英翻訳には著しい乖離があり、それが欧米に対する日本人の心理的態度に起因している可能性があることを指摘した。これらはいずれも日本だけに見られる特殊な現象であると筆者は考えている。
- (10) 情報収集による改変作業はすべて、素人が訳文を読んだだけではまず気がつかない。プロ翻訳者でも英語・日本語を精査してはじめて気がつくほどの微調整作業である。そして、これは事実を追求するジャーナリズム翻訳全般に見られる常套手段であることは、最後に指摘しておきたい。実例は割愛するが、たとえば朝日新聞の天声人語の翻訳や放送通訳・翻訳の場合でも、頻繁に用いられている。